



No. 103

ティー・ブレイク

## Tea Break

～褒めること（適切な評価）の効用～

息子が1歳と1ヵ月半で歩き始めた。歩けることがとても嬉しいようで満面の笑みを浮かべながらヨチヨチと歩いている。私も親バカで満面の笑みを浮かべてそれを眺めている。1～3歳頃は、毎日が「発見の連続」・「初体験の連続」で、とても楽しくて堪らない時期なのであろう。一方、「発明すること」もまた楽しいことであり、乳幼児期における先述の喜び体験を忘れられない人が発明家へと育っていくのかな??なんて思ったりもしている。

大企業に勤める優秀な発明者の方に先日聞いた話であるが、優秀な発明者であるほど、目標設定が高い（大発明を目指している）ため、その過程で出来た小発明（普通人には決して小発明ではないのであるが）には満足しておらず、業績評価を低く自己申告するので、上司がその自己評価をそのまま受け入れてしまい、給与・昇級面で冷遇されている、とのことであった。しかしながら、上司がその発明に目を向け、適切な評価をしなければ、その発明が有効に生かされることはないし、その発明者も報われない（知財部員はなかなか発明発掘活動にまで手が回らないし、その能力がある人もまだ少ないのが現状と思われる）。上司による適切な評価こそが発明発掘活動の第一歩と言えるのではなかろうか。

転じて、親の子供に対する望みが高いと、少々のことでは子供を褒めないため、子供の方でも目標設定を親のそれに合わせるようになり、小さな達成感には喜びを感じられない子になってしまうかもしれない。初めて何かができるようになって、大したことはないが無感動に自己消化してしまい、親にも話さないで、親の方でもそれを見逃してしまう。話してくれたとしても、親のほうで無視してしまう、或いは過小評価してしまう。そんな悪循環が続き、1つ1つの能力の誕生が見逃されていくと、結果的に、すべての能力について伸ばす機会が失われてしまう…。

とすると、小さなことでも初めてできるようになったことには、親が素早く気づいてあげて褒めてあげることが、幸福への階段を駆け上るための第一歩になるのかもしれない。先述の喜び体験は、周り（親）が好意的に反応してくれるというスパイスがあっただけで喜ぶ体験として完結するものようである。「親は褒めることが仕事の1つである。褒めることで誰も損はしない。」と肝に銘じて、我が愛すべき息子（侑人）の成長を見守っていきたいと思う。とりあえず、ヨチヨチとぎこちなく歩けるようになったことを、大発明を成し遂げたかのごとく褒めまくってあげたい。

（岩 y）